水野信元を討った男「石川数正」　　2023.8 浪崎

家康の片腕として活躍も秀吉の下へ出奔!!
信濃松本藩の初代藩主に

織田信長が本能寺で倒れ、徳川家康が豊臣秀吉に次ぐ No2 の地位にあった時、数正は長年重臣として仕えてきた家康の下を離れ、秀吉の下へ出奔します。
「戦国最大の謎」とも言われる数正出奔の真相を、「自分を認め評価してくれた」からと、加来耕三氏が以下のように説明しています。一方、NHKBS「英雄たちの選択」では、その真逆とも言える「お家第一の考えだった」との考え方を示しています。あなたはどちらの意見に賛同しますか?

家康が今川の人質の時もそばにいた数正

数正の生誕は天文２（１５３３）年、あるいは３年の説があります。酒井家や大久保家、本多家などと同様家康の 6 代前から仕える安祥譜代である石川家に生まれました。天文１１（１５４２）年生まれの家康より、9 歳ないし８歳年長でしょうか。
天文１８(１５４９)年に８歳の家康が今川家の人質となり駿府に送られた際には、数正も随行し、以来、家康が１９歳になるまでの１１年間、近くで仕えました。

織田信長との同盟に寄与　　信康、築山殿を今川から救出した数正

この頃三河には外交能力にたけた武将はほとんどいませんでした。その中で、本多正信が帰参後、次第に頭角を現してくるまで、徳川の外交を一手に担っていたのが数正でした。
永禄３（１５６０）年「桶狭間の戦い」で今川義元が戦死すると、それまで今川氏に従属していた家康は、独立へと動き出します。永禄４(１５６１)年家康は織田信長と同盟を模索しますが、この時信長との交渉の使者として遣わされたのが数正で、清洲同盟の締結に彼は寄与しています。
もっともこの時家康の嫡男・信康と正室・築山殿は義元の跡を継いだ今川氏真のもとに、人質として留め置かれたままでした。氏真は清洲同盟締結に怒り、家康に対して信康と築山殿を殺すと脅してきました。
家康は独立に向けて動きたくとも動けないジレンマの中で、今川との人質交換を成立させたのが数正でした。数正はまず、今川氏の重臣・鵜殿長照が守る上ノ郷城を攻め、長輝の息子２人を捕らえます。そして、氏真に鵜殿の息子２人と信康・築山殿との人質交換に赴き、無事２人を救出したのです。

三河一向一揆では一向宗から浄土宗に改宗して一揆制圧に奮闘した数正

家康はその後も他家との交渉があるたびに、数正に全権を任せるようになりました。しかも数正は、槍の名手として数々の武功も挙げています。家康三大危機の一つ、三河一向一揆では、熱心な信者でありながら、数正は一向宗を捨て浄土宗に改宗して家康に付き、一揆制圧に奮闘しました。

このころ家康は、家臣団を東三河衆、西三河衆、旗本の三つの軍団に分ける「三備(みつぞなえ)」という軍制を整えていました。

※三備(みつぞなえ)とは

・家臣団を東三河衆、西三河衆、旗本の三つの苦戦壇に分けて、軍制を整えていました。旗本は旗本先手役と馬回り衆に分かれ、旗本先手役には本多忠勝、榊原康政らがつき、数正は馬回り衆の筆頭を務めています。

岡崎城代を任され、伊賀越えにも同行した数正

永禄１２（１５６９）年には、数正は西三河衆の軍団を預かり元亀元年（１５７０）年の姉川の戦い，元亀３(１５７２)年の三方ヶ原の戦い、天正３（１５７５）年の長篠・設楽が原の戦いなど、多くの合戦に出陣し、先鋒を務めることも度々で、数々の武功を挙げています。天正７（１５７９）年には、家康の嫡男・信康が武田内通の疑惑をかけられ切腹。その後、岡崎城代を任されます。

また、本能寺の変が起こった直後、家康は堺にいて、伊賀路を通って三河に逃げ帰ったとされる「伊賀越え」と呼ばれる逃避行においても、数正は家康に同行していました。

外交の表舞台にいた数正に目を付けた秀吉

しかし、数正の運命が翻弄されるきっかけとなったのは、この天正１０(１５８２)年６月に勃発した本能寺の変でした。家康は、信長亡き後に台頭してきた羽柴秀吉との外交交渉役として、当然のごとく数正を指名しました。

秀吉との最初の面会は、天正１１(１５８３)年の５月のことでした。約１か月前の４月、秀吉は賤ケ岳の戦いで織田家重臣・柴田勝家を滅ぼしています。徳川家としては、秀吉の下へ勝利を祝いに行かなくてはいけません。数正は家康の代参として秀吉のもとを訪れたのです。

この席で秀吉は、数正に目をつけます。秀吉は家康の三河武士団が強力なことは知っていましたから、できれば数正を味方に誘い、徳川家を割りたいと考えたわけです。秀吉のやり方はいつも変わりません、相手が手ごわくて思い通りにならないと、相手の重臣を懐柔して手なずけたり、自分の下へ引き抜いたりして、相手の家中をガタガタにするという手法を用います。それを隠れてこそこそせずに、堂々とやって見せるのが秀吉でした。天正１２(１５８４)年３月、秀吉と、織田信雄・徳川連合軍との戦い「小牧・長久手の戦い」が起こったきっかけも、同じ手口からでした。

秀吉は信雄を目障りだと思いつつも、大した人間ではないと考えていました。とは言え、信雄を支える３人の家老の力量は侮れません。そこでまず、この３家老を信雄本人に始末させようと考えました。

この３家老が使者として大阪城に来た時、秀吉は彼らを接待漬けにします。そして、周囲に「あの３人はもう、わしに寝返っている」と噂を流し、これが信雄の耳にも入ります。こうなれば信雄は、思慮をめぐらすこともなく家老３人を切り捨てる、と、秀吉は読んでいたわけです。

信雄は短慮な人で、自分が世に発言力を持つうえで、大切にしなければならない３人を疑いだす始末。結局、３家老を殺害してしまうのです。秀吉の思うつぼですが、そのうえ秀吉はこれを信雄討伐のきっかけとしたのです。

秀吉の作戦……家康の密書を差し出すと「数正は逐電しようとしている」噂を流す

さらに秀吉は、今度は数正を接待漬けにします。それだけでなく、数正が家康の密書を差し出すと、それを逆手にとって「数正が家康の情報を流し、わしのところに逐電しようとしている」とのうわさを流しました。もちろん、数正は家康の指示で行動しているわけですが、秀吉は話をうまくすり替えてしまうのです。この辺りは何とずる賢いことか!!

逆に秀吉が家康のもとに使者を送った時は「数正を見習えと言われた」「数正の陣羽織、旗をぜひいただきたい」などと言わせて、数正を持ち上げさせます。三河の武士からすれば「なんだこれは? 数正は秀吉に寝返っているのではないか?」と疑心暗鬼になってしまいます。

小牧・長久手の戦いの時に、細かな策略や駆け引きなどの作戦を家康と共有していたのは数正だけであり、自らの判断で動こうとした酒井忠次らを制止したことがありました。ところが忠次は、そうした数正を疑います。そのようなこともあり、秀吉の使者の態度を見ていると、だれしも数正を怪しみます。

秀吉との和睦が徳川家の安泰に……数正の主張

秀吉と家康の和睦交渉では、秀吉は条件として「息子を人質に出せ」と言ってきました。息子とは信康は亡くなっていましたから，於義伊(後の結城秀康)のことです。これには家中は大反対です、「小牧・長久手の戦いでは２度も勝った。何故こちらが人質を送らなければならないのだ」と。しかし、数正は周りから疑念の目で見られながらも、正論を吐きます。「殿が５ケ国の大名になったと言っても、秀吉は少なくとも 19 ケ国を抑えている。ぶつかれば最終的には徳川家は潰される。ここは妥協すべきだ。人質に出すのではなく、養子に出すのだ」と、家中が納得できる案を絞り出して、何とか事を納めたのでした。

於義伊は天正１２(１５８４)年１２月、羽柴秀吉の「秀」と家康の「康」を取って、「羽柴秀康」として秀吉の養子となり、河内の国１万石が与えられました。

秀吉と家康激突の寸前に、数正が出奔

秀吉と家康は和睦に至りましたが、秀吉はさらに自らの野望を推し進めていきます。今度は家康を呼び寄せて臣下であることを承諾させ、国中に知らしめようと画策します。家康が出てこなければ、今度こそは実力で家康を潰す気でいました。ところがいつまでたっても、一向に現れません。間に挟まれていたのが数正です。

そして、天正１３（１５８５）年の１１月１３日、５２歳(53 歳)になっていた数正は、突然家族と数百人の家来を連れて、秀吉の下へ走りました。この石川数正の出奔は、今でも歴史家の間では戦国時代最大の謎と言われています。

片や実力行使に出ようとする秀吉と、片や家康は頭を下げに行くことは１００％ありませんでした。ではどうすればこの局面を打開することが出来るのか、家康を守り助けられるのか!!　数正が出した結論は、「自分が秀吉の下へ出奔すれば家康も手を出せない」と考えたのではないでしょうか。

数正は酒井忠次と並んで、兵の人数、蓄えや軍略など、徳川家の内情を熟知しています。その数正が秀吉側に走れば、徳川はもう秀吉にすべて手の内を知られているのですから、戦うことはできません。

また、数正が出奔する少し前の天正１３(１５８５)年８月、家康は真田昌幸を打とうとしましたが、敗れています。およそ７０００の兵を出したうち、１３００人もの戦死者を出して退きました。退いたのは真田の後ろに上杉景勝がいて、その後ろには秀吉がいることを、家康は知っていたからです。数正の頭の中にもこの時のことが、当然あったと思います。秀吉がその気になれば、もう家康はお手上げです。ここで、しばらく家康が秀吉に打って出ることの無いように自らが秀吉の下へ走ったのではないか。ちなみに、数正が出奔した直後の１１月２６日に中部地方で天正地震という大地震が起こっています。これには勇敢な三河武士たちも、戦どころではなくなったでしょう。

家康と秀吉は義兄弟になる

この後天正１４(１５８６)年５月、秀吉は実の妹・朝日姫を正室として家康に差し出し、二人は義兄弟になります。さらに１０月、秀吉は生母の大政所を朝日姫の見舞いとして岡崎に送りました。家康も、ここまでされては秀吉の臣従要求を拒み切れず、かろうじて三河武士団を納得させることができ、ようやく大阪城へ出向きました。

数正はどう処遇されたか

豊臣政権が成立し、その下で家康が潰されることもなく、後には２６５年間の徳川時代に繋がりました。このことを見ると、数正の出奔という苦渋の決断があって、現代に続く日本の歴史がつくられたと言っても過言ではありません。

数正は秀吉の家臣として仕え、天正１４(１５８６)年に河内の国８万石を与えられます。さらに、天正１８(１５９０)年の小田原征伐後に家康が関東に移ると、数正も松本城１０万石に移封され、現在国宝となっている松本城を築城しました。

数正は豊臣政権下では、これと言った働きはしていません。石田三成あたりはずっと、数正を家康の間者ではないかと疑っていましたから、要職に就くことはできなかったのでしょう。数正は秀吉の挑戦出兵で出陣中の肥前の国名護屋城にて没しました。享年６０歳か６１歳でした。徳川の一大事に臨み、冷静に判断しこれしかないという策で家康を救った男が数正だったと考えています。

NHKBS「英雄たちの選択」より

磯田氏、平山氏、千田氏、？　４人の考えは「徳川家の分裂を防ぐために出奔」

　数正が出奔した時の徳川家は、秀吉に対する考え方が大きく割れていました。現状では秀吉と一戦交えて徳川の力を示すことだとする者と、秀吉の力は絶大でありこの先を考えれば今は敵にするべきではないという者に割れて、まとまりがつかなかった。
　そんな時に数正が出奔したのだが、今は秀吉の臣下になるべきと主張した数正は、自分が抜けることで徳川家内の混乱を回避することを選んだ……　というのである。冷静に考えれば今の秀吉は絶大な力を持っており、とても歯が立たない。それよりも、徳川としてはこの先のチャンスに掛けることの方がふさわしい。それに、徳川の武力、戦略などすべてを知り尽くしている数正を引き抜いた秀吉に、徳川としてもうかつに手を出すことはできない……これらから、秀吉の臣下になることを決めた。
　つまり、数正はよくよく考えて徳川の安泰と繁栄は次に譲ることを選択したのだ。これまでの家康の艱難辛苦を想えば、ここでつぶしてはいけない、もっと先に望みを託すべきだと考えた。

　他の資料では、秀吉に秀頼が生まれ跡継ぎが出来た時点で家康は、自分が天下を取るにはとにかく長生きをしなければならぬとの思いが強かった。そのために体を大切にする健康第一の考えから薬の研究に励んだ。そして、漢方薬を自身で調合するのを趣味としていた。できた薬を家臣にも飲ませており、効能も確かなものであったという。
　結果、当時の人の寿命は５０歳くらいが普通の中で、７５歳まで生きて天下統一を成し遂げることが出来た。今の世で言えば、「急いては事を仕損じる」に通じることかと……

その他の意見

　数正は於大の兄・信元を家康の命令で殺害しており、於大の反感が強くて居ずらくなった説もある。

　長篠合戦図屏風の石川数正